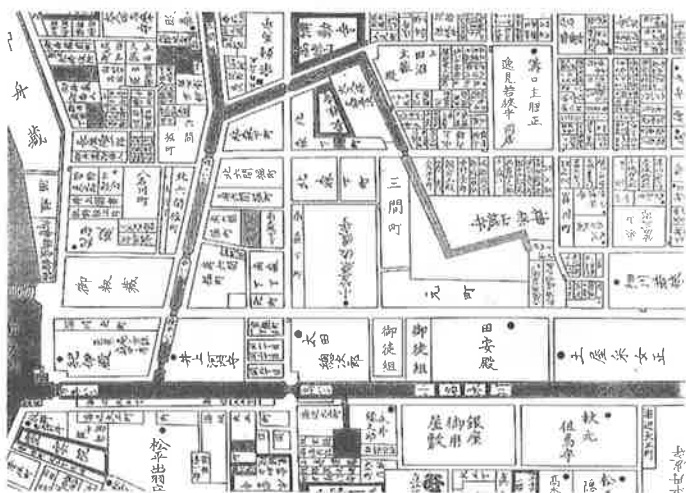


# 清澄通りから大横川

江東区深川江戸資料館



文久2年(1862)本所深川絵図より森下周辺

先号では隅田川から清澄通りまでの小名木川沿岸を紹介しました。この号では清澄通りから大横川付近までの小名木川沿岸を探ってみましょう。まずは右岸(北岸)から。

## 1. のらくろードの江戸時代

高橋通り商店街、通称のらくろード。歩行者天国で知られたこの通りの先に、新大橋が架かっていました。明治45年(1912)に現在地に移り、新大橋通りができましたが、この高橋通り商店街の通りが初代の新大橋通りということになります。

幕末の江戸図を見ると、この通りの北側は清澄通りの付近が南森下町で東へ肥前唐津藩主小笠原佐渡守下屋敷(現深川小学校付近)、深川元町、常陸土浦藩土屋采女正下屋敷(通りの向かいに広大な屋敷地があり、ここはわずかな敷地)、松浦氏屋敷、富川町、肥後熊本新田藩細川能登守抱屋敷、ふたたび富川町があって、道がなくなり和田藩岡部筑前守中屋敷となり、その東側が深川西町でその先が大横川の河岸地となります。

一方通りの南側は、現清澄通りに面して遠江掛川藩太田摂津守下屋敷から始まって、幕府屋敷、今の森下文化センターあたりが田安中納言下屋敷、その東隣が常陸土浦藩土屋采女正下屋敷で、その先が前述の岡部筑前守中屋敷となります。

このように、今ののらくろード、初代新大橋通りは、通りの北側が武家屋敷と町場が交互になり、南側は武家屋敷が大横川まで続いていたことがわかります。

## 2. 森下・元町

ではこの付近の町は、どんなところだったのでしょうか。通りの北側にあった南森下町から見てみましょう。森下という町名は現在も1~5丁目であり、地下鉄の駅名にもなっているほど親しまれていますが、江戸時代からの町名です。「御府内備考」によれば、南森下町のほかに森下町・北森下町といった町があり、清澄通りをはさんで東西、こののらくろードの北側に広がっていました。地名の由来は、江戸初期現深川小学校付近にあった肥前唐津藩小笠原佐渡守の屋敷地が酒井左衛門尉の屋敷だった頃、邸内の木立が森のように生い茂りその周辺に町家が増えたので、「森下」となりました。江戸時代の初め、開拓間もない深川で、まさに森の下に開けた町が森下ということになります。

次に深川元町。同じく「御府内備考」によれば、慶長元年(1596)深川八郎右衛門等による開発で、深川村が成立しましたが、やがて家もふえて町場のようなになったため、南は小名木川・西は隅田川・北は本所(おそらく堅川あたりでしょう)・東は猿江村に囲まれた一帯を深川町と呼ぶようになりました。深川元町は「元の町」、発祥の地という意味がこめられています。さらに深川西町は、東側を流れる大横川の西側に開かれた町なので西町といいます。

## 3. 森下文化センター 2つの展示室

のらくろードの南側にある森下文化センター。この1階には田河水泡のらくろ館があります。漫画「のらくろ」の原作者・田河水泡は本所で生まれて、深川の臨海小学校を卒業しました。その田河さんの



高橋のらくろード入口

ご家族から遺品や原稿を寄贈いただいたのを機に、この展示室ができました。また2階にはたくみ工匠壺番館・式番館があります。江東区は職人の町でもあります。特に本所にも近いこのあたりには、区の無形文化財（工芸技術）保持者の方がたくさん住んでいます。その職人の技術や歴史、作品を紹介するのがこの展示室です（いずれも入場無料）。

## 4、高橋

清澄通りに架かる高橋は、寛文の頃（1660年代）にはまだ渡し場でした（この時点での小名木川に架かる橋は万年橋だけ）。その後、架橋された時に通船のため弓なりに高く作られたので高橋と付けられました。明治になって、この橋際に蒸気船の発着所がおかれしました。小名木川は隅田川と中川を結ぶ江戸以来の水上の要路でしたから、明治以後の汽船の運航とともに、日本橋方面と房総とを結ぶ航路が作られたのです。

## 5、ほしかば干鯛場

江戸図や切絵図をみると、小名木川の南岸、高橋の東方に入り堀が見えます（今の白河小学校西方）。ここは、銚子場といわれた干鯛場の跡です。干鯛とは鯛を油抜きしたもので、畑の肥料として江戸時代に製造・販売されていました。かつて深川には干鯛の取引市場が4ヵ所もありましたが、この銚子場はその一つで、銚子産の干鯛が利根川・江戸川・中川を経て小名木川に入り、この銚子場へと運ばれました。成立は元禄9年（1696）で町人の次郎右衛門ほか5人が、武家屋敷を譲り受けて干鯛場を開いたといえます。

## 6、れいがんじ霊巖寺と松平定信

干鯛場の東は、小名木川沿岸に海辺大工町（前号で紹介）が続きますが、町域を分断するように西から上野館林藩秋元但馬守抱屋敷・信濃上田藩松平伊



松平定信墓



江戸六地藏第五番（霊巖寺）

賀守下屋敷や旗本屋敷がありました。そして沿岸の町場・屋敷とは対比的に、その南側は霊巖寺を始めとする寺院の境内地が広がっていました。

小名木川から南の仙台堀の間、深川江戸資料館の周辺は、現在でも寺町の名にふさわしい景観が見られます。霊巖寺は、寛永元年（1624）霊巖島（中央区新川）に霊巖上人が建立しました。上人は徳川家康・秀忠・家光といった歴代将軍の帰依を受け、日本橋の東南にあたる土地を賜り、自ら開拓して堂宇を建立しました。それが明暦の大火後の江戸の再開発にともない、この深川の地に移ってきました。

将軍家とゆかりの深い寺院だったため、8代将軍徳川吉宗の孫で、寛政の改革を推進した松平定信の墓があります。

この改革の特徴に、江戸の都市政策がありますが、なかでも授産施設としての石川島人足寄場の創設や、町運営の経費（町入用）を節約して、新たに開設した江戸町会所に節約額の7割を積み立てて、非常用の備蓄や旗本・御家人・商人への低利貸付などに融通するといった新しい政策を打ち出しました。ことに町会所積み金は、明治初年には143万円に達し、東京府の公共事業に役立てられました。国の指定文化財でもある定信の墓は、大名の墓としては決して立派なものではありません。質素・儉約を改革のスローガンに掲げた定信にふさわしいものといえます。

境内には定信のほかにも、越後高田藩主榊原家・桑名藩主松平家・摂津尼崎藩主松平家・伊予今治藩主松平家など大名家の墓が数多くあります。

霊巖寺の東隣が深川江戸資料館。旧江東区役所本庁跡に昭和61年（1986）開館しました。